

基幹会計情報システムを強化、 業務全体の効率化を実現

海洋土木のパイオニアとして羽田空港再拡張事業等の大規模プロジェクトに携わり、2008年に創業100周年を迎えた東亜建設工業(株)様。2003年には業務改革の一環として基幹会計情報システムを一新。しかし、スタート時の予想を上回るハイペースで扱うデータ量が急増し、従来のストレージシステムではディスク容量が2008年に枯渇すると予測。2007年より拡張性を重視し、システムの見直しが行われました。

Disk to Diskでバックアップする 仕組みの構築へ

東亜建設工業(株)様では、2003年にOracle E-Business Suiteを採用した基幹会計情報システム「STAR」を構築されたものの、想定以上にデータ量が年々急増、業務にも影響を及ぼしていました。テープでのバックアップ作業では一旦業務を停止しなければならず、データの容量が増えるほどバックアップ時間が長くなり、バッチ処理時間を圧迫。日常業務にも支障をきたすようになりました。

そこで拡張性とスピードをあわせ持つ、Disk to Diskの仕組みの構築が急務となり、選ばれたのが富士通のストレージシステム「ETERNUS2000」でした。データ保全を絶対とする会計情報システムにふさわしい堅牢性に加え、ディスク増設を容易にする拡張性が評価されました。ディスクドライブは最大72台、ディスク容量は最大72TBまで拡張可能なため、ストレージ容量に余裕をもって導入することができ、ディスクドライブやドライブエンクロージャの増設も可能です。また、データをより強固に守るため、ディスクドライブの故障の兆候を予知して自動コピーする「リダンダント・コピー機能」や主要コンポーネントの二重化等、ミッドレンジクラス以上の製品で培った高信頼技術を採用し堅牢性を高めている上、省エネにも配慮したコンパクト設計です。

事前のシミュレーションによって、 バックアップの処理スピードも検証

処理スピードの向上も、採用のポイントの一つです。

「ETERNUS2000」のDisk to Diskの高速コピーにより、バックアップ時間の短縮を検証。導入前に行われた同一環境下でのシミュレーション結果によると、従来モデルに比べ、約2倍の性能向上が確認されました。実際の導入時は、システムの切り替えもスムーズで、システムを停止したのはわずか2日間。連休日を利用し、業務に支障なく全てのデータを移行することができました。

リニューアルした基幹会計情報システム「STAR」は、2008年2月に稼働。柔軟な拡張性を備えることで、データ容量の急増に対応した今後の増設計画が立てやすくなっています。さらに、現場での効果について、同社管理本部情報システム部運用グループリーダーの夏目秀樹氏は「従来は5時間かかっていたバッチ処理を、2時間に短縮することができました。予想を上回るスピードで、業務効率のさらなる向上に役立っています」と、語られます。

ストレージ領域を活用し、 外部サブシステムの統合も視野に

処理スピードの速さは、作業工数の低減、会計処理の迅速化につながり、基幹業務全体の効率化を果たしています。また、従来機の約半分程度のコストで同等以上の性能が確保でき、コストパフォーマンスが向上。

今後は、豊富なストレージ領域を活用し、基幹会計システムに関連する別サーバで稼働中の外部サブシステムを統合することも検討されています。